様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３１０１７８

研究課題名（和文）移民とその故郷：非同化適応戦略とトランスナショナリズム表象

研究課題名（英文）Migrants and their 'homes': strategies of non-assimilative adaptations and representations of transnational ties

研究代表者
高橋　均（Takahashi, Hitoshi）

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：５０１５４８４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　14,000,000円

研究成果の概要（和文）：移民がホスト国に定着後も、故郷の家族や地域社会とのトランスナショナルな絆を断たずに維持する傾向は、1990年代後半に生じた国際音声通話の極端な低廉化により新しい局面に入った。移民の家族や近隣はトランスナショナルなソーシャル・フィールドとして、送出国と受入国のますます広い範囲の地域社会の非エリート同士を日常的に結びつけるようになり、移民が故郷の家族や地域社会に及ぼす影響は経済・行政面にとどまらず、個人の内面の世界観にまで影響を及ぼすようになった。一方でこのような故郷との絆を断たない移民の存在は、ホスト社会に新たな脅威感を生み、新種の排外主義に結びつく可能性もある。

研究成果の概要（英文）：Transnationalism is the term that describes the trend of the migrants today who increasingly maintain the transnational ties with the "home" families and communities, even after final settlement in the "host" society. The ever-cheaper international telephone call since mid-1990s have enabled the migrants to develop a "transnational social field", which directly links non-elites of ever-expanding areas of both sending and host countries. The influence of the migrants upon the "home" community have strengthened, not only in the spheres of household economy and town infrastructure, but also in internal values and worldviews of the individuals. The growth of migrants' transnational activities might induce in the "host" society a sense of threat which might lead to a new type of nativist emotions.

研究分野：ラテンアメリカ史・ラテンアメリカ地域文化研究

キーワード：移民　トランスナショナリズム　統合　ソーシャル・フィールド　排外主義　グローバル化　ＩＴ技術

１．研究開始当初の背景

(1) 移民のホスト社会への適応という主題は、かつては(a)同化主義（社会的上昇の前提は言語・文化的同化だとする）のアプローチが主流であったが、1970 年代を境に(b)多文化主義（団体形成によるホスト国家・自治体との交渉を通じて自分たちの言語・文化を保持したままの適応が可能だとする）のアプローチがそれにとってかわった。それと並行して受入都市の中に形成されるエスニック・エンクレーブや、それを市場とするエスニック企業が新しい適応戦略として注目を集めた。

(2) それに加えて最近注目を集めているのが「トランスナショナリズム」の現象である。もともとは国を異にする個人同士が国家を媒介せず直接に社会関係を結ぶことを意味する言葉だが、移民研究の場合は、国際間の交通・通信手段の発達と費用低廉化に伴い、移民がホスト社会に定着後も、故郷の家族はもちろん、地域社会とも絆を断たずに維持する傾向を指す。当初注目を集めた現象は、家族への送金や同郷団体を通じての出身自治体への寄付が、ほとんどひとつの輸出産業に匹敵する外貨稼得項目となったことであった。このようなトランスナショナルな故郷との紐帯を維持すること自体がひとつの新しい適応戦略として注目されるに至った。

２．研究の目的

(1) 移民が故郷との間に保持するトランスナショナルな紐帯に三つの角度からアプローチし、次のような問いに答えることをめざす。(a)「移民にとっての故郷」。移民が故郷との間に維持するトランスナショナルな紐帯は、いま現在どのような特質と意義をもつか、とりわけ、移民のホスト社会への適応戦略においてそれはどのような意味をもつか。

(2) (b)「故郷にとっての移民」。またそのような紐帯は、開発途上社会である故郷の家族や地域社会にどのような影響を及ぼすか。送金や寄付によるプラスの経済効果があることが期待される半面、ホスト国と送出国の間の極端な力の非対称性からいわばトランスナショナルな過疎化・周縁化を生みだす可能性はないか。

(3) (c)「ホスト社会にとっての〈故郷と切れない移民〉」。このようなトランスナショナルな紐帯には、近代国民国家のメンバーシップとしての国籍・市民権の原理を脅かす潜在的可能性を含んでいる。その潜在的脅威がホスト社会にとってどのように表象されるか。その表象のされかたによっては、何らかの新種の排外主義に結びつくことはないか。

３．研究の方法

(1) 上記の三つのアプローチに対応する三つの班を組織し、互いに成果中間報告をしながらそれぞれに研究を進めていく。(a)「移民にとっての故郷」班は当初在米ヒスパニックのうちとりわけ既存研究の多いメキシコ系労働移民に注目し、在日韓国朝鮮人の事例を参照しつつトランスナショナルな紐帯の特質と意義を調査する。

(2) (b)「故郷にとっての移民」班は当初アメリカ・カナダのアジア系、フランスのアフリカ系移民に注目し、福建・浙江やアフリカの旧フランス領植民地におよぼす影響を、故郷支援団体(HTA)やマイクロファイナンス団体（MFI）などに重点をおいて調査する。

(3) (c)「ホスト社会にとっての〈故郷と切れない移民〉」班は、とくに言説・思想面に重点をおき、過去のドイツやフランス、アメリカにおけるユダヤ人など歴史上の重要事例を参照しつつ、目下のドイツ・フランスのムスリム、アメリカにおけるアジア系移民の故郷との紐帯がどのように言説化されているかを調査する。

(4) 定例研究会の他、海外の専門家を招いて国際シンポジウムを実施し、また国内外の資料を収集して保存する。

４．研究成果

(1) 「移民にとっての故郷」。移民が故郷との間に維持するトランスナショナルな紐帯は、これまで海外送金など経済効果や、送出国側の国籍法改正によるホスト国に帰化した移民への二重国籍の容認など制度面に注目した研究が多かったが、最近では非エリート労働移民が「トランスナショナル・ソーシャル・フィールド」で営む日常（エブリデイ）生活に着目するアプローチが成果をあげている。この「フィールド」は国民国家対国民国家の接触点をバイパスして、別々の国にある地域社会と地域社会の非エリート層を直接につないでいる。送出国側でも受入国側でも、伝統的な送出地域・受入地域以外の地域がますます多くこれに参入し、送出地域と受入地域は連鎖移民の原理によって一対一で緊密に結びつく。

(2)非エリート層同士のこのような直接の結びつきを可能とした条件が、1990 年代半ばから 2000 年代初頭にかけて起こった国際電話料金の極端な低廉化である。その下げ幅は 99%にものぼり、分あたり数ドルだったのが数セントになり、千円で約三時間も話せるようになった。この時期の IT 技術革新のグローバル化促進の例としては、エリート層やビジネス従事者が使用者である e メールやインターネットが注目されがちだが、書き言葉を操る能力が低く、交渉や意志決定に長い時間をかけての会話を要する非エリート層の労働移民にとって最重要の技術革新は、むしろただの音声通話の低廉化であった。

これに加えて GMS 規格の携帯電話がこの時期途上国に急速に普及し、農村部への急速な基地局設置などのインフラ整備に支えられて、家族・親戚・近隣間の意思疎通をさらに円滑化した。「トランスナショナル・ソーシャル・フィールド」はこれを基盤に成立した。

(3) トランスナショナルな紐帯を維持することとホスト社会への統合との間の相関が正か負かについては明快な答えは出ていない。移民はホスト社会への適応に失敗し、差別や排除を受けたことへの反発から故郷との紐帯を強めることがある。しかし半面、トランスナショナルな紐帯を維持する活動には送金や帰郷の旅など費用がかかるものが多く、適応に成功して資源を獲得した者ほどそのような活動を行うので、どちらかといえば正の相関が観察されることが多い。

(4) いまひとつ議論のある問題は、トランスナショナルな活動は移民第二世代以降に受け継がれるかどうかである。アメリカ合衆国では 1965 年移民法改正後流入した移民の子どもの世代が成年に達し、そのような活動をする資源を獲得した 2000 年代からさかんに調査が行われるようになったが、第一世代よりは消極的であることは確かである。しかし上記の国際電話通話の低廉化で「トランスナショナル・ソーシャル・フィールド」を通じて常に故郷から新規の第一世代移民が流入してくることを考えるとこの点も一概には言えない。

(5)「故郷にとっての移民」。従来移民送出地域への移民の影響について提起された問題は、送金等による経済的利得を受ける世帯が増え、自治体の設備等が充実する半面、若年層が流出して年齢層の偏った過疎化が生じて経済が不活性化したり、また進学よりも移住を選ぶために社会の低学歴化が進行することであった。しかし今日では状況はさらに進み、移民送出地域の、階層的には非エリートであり、全く都市化が進んでいない社会に属する家族や親族や近隣自体が、それ自体移住者と非移住者のメンバーを含みこむ「トランスナショナル・ソーシャル・フィールド」として機能するようになった。

(6) 農村部非エリートの場合、移住のためには家族・親族・近隣のメンバーである先達の移民の導きが是非とも必要である。外国語能力の問題だけでなく、移住者は国外移住することにより初めて都市生活を経験することが多く、その面でもガイダンスが必要だからである。上記のような緊密なコミュニケーションがとれるようになると、そのような移住の便宜だけでなく、移住したメンバーの獲得した世界観やハビトゥスが、移住しないメンバーのそれに大きな影響を及ぼすことが考えられる。後者が都市化を経ない農村部非エリートであることを考えに入れると、その影響力は相当に大きいものと考えられる。

(7) 「ホスト社会にとっての〈故郷と切れない移民〉」。第二次世界大戦後に開発途上国から流入してきた移民に対してこれまで先進諸国で発生した排外主義は、労働市場での競合や、福祉行政や納税者への負担を理由とするものであった。しかし前者については労働市場が実は分節化しており、いわゆる３Ｋの低賃金職に就く移民と現地人とは競合しないとの認識が普及し、1994 年のカリフォルニア州住民提案 187 号に代表されるような従来の排外主義はやや下火になっている。

(8) しかし最近の先進諸国の言説をみると、本プロジェクト実施中に、移民の維持するトランスナショナルな紐帯への脅威感に基づいている可能性がある新しい排外主義感情の事例がいくつか浮上してきた。(a)中国の大国化に伴い、その富裕層がリスク管理のためにアメリカやカナダに移住したり出産したりすることへの地元の警戒感が強まっている。(b)ヨーロッパに移住したムスリムの移民子弟が出国してイスラム国のような運動に参加することへの不安が強まっている。(3)日本のとくにインターネット上で中国・韓国への反感が表明されることが多くなっている。これらの新しい展開については是非調査をつづけることが必要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）

① 遠藤　泰生、「信教の自由」から考える自由の二元的性格、アメリカ太平洋研究、査読無、14 巻、2014、130-138

② 外村　大、日本人は「在日朝鮮人問題」をどう考えてきたか：現代日本における排外主義、日本学、査読有、38 巻、2014、40-70

③ 石田　勇治、望田史学の地平―戦後市民社会の日独比較に向けて、ゲシヒテ、査読無、7 巻、2014、53-58

④ 鈴木　茂、地域研究の映画：総特集「混成アジア映画の海　時代と世界を映す鏡」に寄せて、地域研究、査読有、14 巻、2 号、2014、264-270

⑤ 外村　大、戦後日本に在留した朝鮮人被動員者数とその背景、コリアンスタディーズ、査読無、1 巻、2013、63-75

⑥ 増田　一夫、「哲学的人間学」と生存の政治学―アーレントによるフランス革命とルソー―、ODYSSEUS、査読無、18 巻、2013、131-158

⑦ 外村　大、安定成長期日本の外国人労働者―グローバリゼーション下の移動の胎動―、アジア太平洋研究、査読無、20 巻、2013、277-291

⑧ 西崎　文子、ウッドロー・ウィルソンとメキシコ革命―『反米主義』の起源をめぐる一考察、思想、査読無、1064 巻、2012、118-138

⑨ Yuji Ishida、Overcoming the Past? The Postwar Japan and Germany、Han, Sang-Jin (Ed.), Divided Nations and Transitional Justice: What Germany, Japan, and South Korea can teach the World. Boulder, Paradigm Publishers、査読無、2012、146-159

⑩ 遠藤　泰生、移民・難民・市民権―環太平洋地域における国際移民：特集にあたって、アメリカ太平洋研究、査読無、12 巻、2012、146-159

⑪ 森山　工、遺体を同化する―マダガスカルにおける墓と埋葬、国立民族博物館調査報告、査読有、103 巻、2012、187-205

〔学会発表〕（計 28 件）

① 増田　一夫、初めに―差異、寓話、そして前未来、ジャック・デリダ没後 10 年シンポジウム、ジャック・デリダ没後 10 年シンポジウム、2014 年 11 月 22 日、早稲田大学（東京都新宿区）

② 西崎　文子、A Story of 'Self-Government'：A Contested Legacy of Wilsonian Diplomacy、単独セミナー、2014 年 9 月 5 日、ヴァージニア州（米国）

③ 高橋　均、総括・コメント、国際シンポジウム「移民国家のつくられ方：アメリカ、オーストラリア、スペインの比較」、2014 年 6 月 14 日、東京大学（東京都目黒区）

④ 高橋　均、研究動向と序論をめぐる議論の問題提起、人の移動研究の新たな展開をめざして―蘭信三編著『帝国以後の人の移動』合評会、2013 年 12 月 7 日、東京大学（東京都目黒区）

⑤ 外村　大、プロレタリア文化運動と在日朝鮮人、国際シンポジウム「在日コリアンの生活と文化」、2013 年 6 月 29 日、青厳大学校在日コリアン研究所（韓国順天市）

⑥ 遠藤　泰生、アメリカ合衆国における黒人奴隷制度の歴史、長野市民教養講座（招待講演）、2013 年 6 月 14 日、ホテルメトロポリタン長野（長野県長野市）

⑦ 西崎　文子、第二期オバマ政権とアジア―歴史的文脈から考える、日本経済研究センター会員会社・部長昼食会、2013 年 1 月 15 日、日本経済新聞社東京本社ビル（東京都千代田区）

⑧ 遠藤　泰生、アメリカ史学研究の現在を考える：地域研究の視点から、日本アメリカ史学会、2012 年 12 月 4 日、東京大学（東京都目黒区）

⑨ Kasuo Masuda、Traduire au Japan、Atelier de traduction. Centre d'etudes interdisciplinaires des faits religieux、2012 年 11 月 28 日、パリ（フランス）

⑩ 外村　大、戦後日本における「在日朝鮮人論」―多民族社会化の合意を阻んだもの、史学会、2012 年 11 月 10 日、東京大学（東京都文京区）

⑪ 外村　大、戦時労働力動員をめぐる日本帝国の本国・植民地関係、現在史研究会、2012 年 10 月 14 日、明治大学（東京都千代田区）

⑫ Yasuo Endo、Seeking New Directions of American Studies in the 21st Century、ANZASA（Australian New Zealand American Studies Association）2012 Biennial conference、2012 年 7 月 6 日、ブリスベン（オーストラリア）

〔図書〕（計 12 件）

① 石田　勇治他（木村精二・千葉敏之・西山暁義編）、山川出版、ドイツ史研究入門、2014、177-201

② 高橋　均他（網野徹哉・橋川健竜編）、放送大学研究振興会、南北アメリカの歴史、2013、145-156，213-225

③ 高橋　均他（歴史学研究会編）、岩波書店、世界史史料　11　二〇世紀の世界、2012、151-153，267-268

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　均（TAKAHASHI HITOSHI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：50154844

(2)研究分担者
鈴木　茂（SUZUKI SHIGERU）
東京外国語大学・総合国際学研究院・教授
研究者番号： 10162950

(3)連携研究者
増田 一夫（MASUDA KAZUO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：70209435

遠藤 泰生（ENDO YASUO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：50194048

石田　勇治（ISHIDA YUJI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30212898

西崎　文子（NISHIZAKI FUMIKO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：60237691

森山 工（MORIYAMA TAKUMI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：70264926

外村 大（TONOMURA MASARU）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：40277801